

正月の三日間は休みにして、四日目から個人授業となった。次第に雪深くなつていく道を、水野さんの部屋まで行くのに一時間以上も歩いて行かなければならない。康夫は祖母に個人授業のことを話して、ゆで卵とジャガイモ、サツマイモ、切り餅などいつも二人分背負って通った。

水野さんが教える数学や科学の個人指導は想像以上だった。また、その勉強が将来の人生にどんな影響を及ぼすかも、興味深く、わかり易く解説してくれる。だからあれほど嫌いだった数学さえ、どことなく面白いものに思えてくるは不思議だった。

「この数式はね。例えば、船のスクリューを造る時なんか絶対必要になるんだ。羽の形状はこんな風にひねっているだろ。先っぽの円みのある曲線はこの数式が基本になるから、数式を知っていないともっと難しいひねりの計算はできないんだ・・・大きなエンジンを使ってもスクリューの形をちゃんと計算して造らないと、スピードも出ないし、水の抵抗を無駄に受けて振動はするし、船もスムーズに走らない・・・」

「竹とんぼなんか、そうなんだべな？」
「あれね！そうだよ。風切りを計算して形にしないと高く飛ばないね」
科学は康夫の好きな絵にも通じるから大事だ。特に自然科学は大事だと言った。

「レオナルド・ダヴィンチは有名な絵描きだけど、優秀な科学者でもあるよね。知ってる？」

「知らねエ・・・」

「鳥が羽を持って空を飛ぶだろう。その羽は元々腕だった」

「なんでエ・・・」

「何万年も経て、少しずつ腕が羽に変化していくのを進化するというのさ。自然の環境に適応して空を飛ぶ。不思議だろう？」

「んだなあ・・・」

「その不思議な成り立ちを研究して、人の社会に役立つものを創るのを自然科学というんだ・・・鳩と鳥の羽は見た目で見えないけど大きな違いがある。なんだと思う？」

「なんだベエ・・・」

「鳩が飛び立つ時、バタバタと音を立てるだろう。鳥が鳩のように音出したら、獲物のネズミやモグラなんかその音に驚いて逃げちやうよね・・・鳥は、

夜暗い静かな時に狩りをするから、音を出さない羽を持っている」

「ほんとけエ・・・」

「羽を顕微鏡で見るとその違いがわかる・・・鼻が夜目を効くことは誰でも知っているけど、羽のことは多くの人は知らないよね」

「知らねベエ・・・そんで、何の役に立つんだべか？」

「すぐ役に立つとは限らないね・・・発明というのは誰でも知っていることだけでは出来ないんだよ。探究するとはそういうものを一杯頭に入れて、いろいろ組み合わせで応用することなんだ・・・ただ知っていることを自慢しても意味はないよ。頭の中の引き出しに、いろいろ勉強したものをに入れて置くことが大事なのさ。ダビンチが絵描きになれたのも、異なる種類の引き出しがたくさんあったからさ」

「ゴッホもけエ・・・」

「そうだゴッホもだ。ゴッホの手紙は告白文学として高い評価を受けている。東洋美術や文学を通して、そこに息づく異文化にも共感できる考えを持っているた」

「自然科学を知らねばあ、芸術家にはなれねえだか？」

「そうだね。君が芸術家を目指すなら、それを勉強しなければならないよね」
康夫は水野さんの知識や考え方に少しでも近づこうとしていたが、一体この人はどのくらいの引き出しを持っているのだろうか。懸命に努力して、果たして追いつくことができるのだろうか。

「世界の産業革命は、もう学校で勉強したよね？」

「うん」

「その中の印刷技術がどうして産業革命の一つに数えられるか？」

「うん。こういう本だとか、新聞だとか情報の伝達が大事じゃねのか？」

「まあ、教科書では大体そこまですか教えていない。しかし、教科書だけ知っても引き出しは増えないし、皆と同じだ。教科書はあくまでも学ぶきっかけだから、そこで止まったら同じ人間になってしまう」

「・・・」

「鼻の羽と同じ疑問を持って、その不思議さを調べようと興味を抱いて努力しなければならいんだ・・・わかるかな？」

「むずかしなあゝ」

「江戸時代の木版画は知っているよね。木版画したことある？」

「年賀状なんかは、木版画だべ」

「木の板を彫刻するの大変だろう？」

「おら、彫刻すんの好きだべ」

「あれは凸版というね。千ページもある辞書の小さな字を、彫刻刀で掘れる？」
「一生かかるべな」

「産業革命は平版だよ。最初は石を使った。純度の高い石灰石を使ったんだ。鼻の羽と同じく自然科学と言える発見だね。どんな発見だったか、どんな人が発見したか知りたい？」

「知りてエ、教えてけるじゃ」

「ほら！その知りたい願望が大事なんだよ。教科書には書かれていないし、答えもない。そこに疑問を持った人だけが自分だけの努力で調べるんだ。それが発明だよ。その大発明をした人のこと、知りたい？」

「うん。知りてエ、教えてくれる」

「じゃあ、君が教科書や、自然観察やいろんなことに不思議や疑問を感じたら、自分でそれを調べる努力をする？・・・そう約束するなら教えてもいい」

「うん、約束する。わかるまで調べる」

「絶対に？」

「絶対に！」

「約束だからね！」

「でも、なんで、そんなに厳しく言うべ？」

「じゃあ、今日の最後の授業として教えよう」

「・・・」

「・・・ヨーロッパの国はどの国も貴族社会だった。平等じゃなかったね。貴族はオシャレで、極楽鳥が進化するみたいに真っ白なシャツで、女を誘った。貴族は自分達で洗濯しないから白いシャツは洗濯屋に出すよね。アイロンも掛けてピシッとカッコつけたい：まあ、これは皮肉だから覚えなくてもいい：：だから巷は洗濯屋が多い。『洗濯女』という悲しい民謡もあるし演劇もあったほどだから、洗濯屋は貧しい平民が主だった。洗濯屋には石灰石を平らに磨いた台が必ずあって、そこでアイロン掛けをした。何故、石灰石がアイロン台になるか？」

「洗濯屋と印刷の関係かあ？まるつきし、わかんねエ」

「アイロンを掛ける前に、シャツを霧吹きで湿らすとアイロンが掛かりやすい。台にした石灰石は水を吸うから辺りを濡らさない・・・ポイントは、石灰石は水を吸うことだ。この原理からアイロン台に便利だとよくわかるよね」

「・・・」

「或る洗濯屋では、母親が忙しいので小さな男の子に買い物頼んだ。その子供は買い物名前と数を、そのアイロン台にクレヨンみたいなので、忘れないようにと書き付けた。母親はそれをいたずら書きと思って怒った。洗濯し終

わった白いシャツが汚れるだろうと、子供をきつく叱って頭をゴツンくらいしたかなあ？・・そして、シャツのシミ抜きをする薬品でその書き付けをきれいに消した。それから何年も経って、青年になったその男の子が、ある時その洗濯台を見て驚いた！

「なんでエ？」

「そうだ！そのなんでエ？だ。青年がアイロン台を見たら、子どもの頃に買っ物を言い付けられ、叱られたことを思い出した。つまり、消えたはずの昔の書き付けが浮き出ていたんだ。『なんでエ』と思った・・」

「先生、訛ってんべなあ？」

「そうか？君のうつつたかな？」

「まーたあ、じらすー」

「そして、そばに有った霧吹きで、その浮き出た文字に水を吹きかけて見た。どう？・・」

「やめてくれー、早く、先いくべさー」

「すると、文字の部分だけが水をはじいた。文字以外の部分は水を吸った：」

「・・そんで？」

「ん？それだけ」

「エーッ、そんだけで、産業革命かあー？」

「たったそれだけでも、大変な発明になったんだね。つまりねッ、水を吸うところは親水性で、水をはじくところは親油性というんだ。その真っ平らな石の表面は見た目だけではわからない。でも、まったく異なる体質になった」

「・・」

「スポンジみたいな物に水を含ませて、そのスポンジで石の表面を拭くと、文字の部分だけが弾く。そこへ、油性インクを付けたローラーで転がすと、インクは水が弾いた部分だけにインクが付くね。そこに紙を置いてプレスするとどうなる？・・木版画に似てない？・・木版画のように紙にインクを写し取る事ができたんだ・・わかった？」

「何となく、わかったような、わがんねエー、ような・・」

「君がよく言う、ポジティブとネガティブだよ。でもね！この青年がこの現象を見つけたとしても、まだ発明したとは言えないんだ。だから、青年はそれから勉強してそのメカニズムを解明して、より正しい理論やデータによって再現するんだ」

「ふーん、だか・・」

「子どもの頃、使ったクレヨンには脂肪分が含まれていた。お母さんが使った染み抜きにはわずかに酸性成分があった。それによって石灰石、つまりカル

シウムだよ。その三つが偶然に化学反応を起こして脂肪酸カルシウムという油性物質に変化したんだ。そのメカニズムを青年は解明して大発明をした」

「んじやあ、おら達の教科書とか辞典とか、おつきな世界地図だとか、その発明で作ってんのがし？」

「そうだ。最初は石を使って、石版画というのかなー、ほらっ、ロートレックを知ってるだろ？あのポスターの版画なんか石版画で作っているんだよ」

「んだか？おら、ロートレックも好きだよ」

「石版画からリトグラフになって、オフセット印刷になったけど、その基本原理は全く昔のままなんだ。蒸気機関は産業革命だろ、だけど、蒸気機関車なんかはもう走っていないでしょ。でも、印刷革命の方は今も変わらず残っている。凄い発見だって、これでわかるよね」

「おもしろもんだな、先生も良く調べたなー、大したもんだ。こんな身近にあんのに、誰も知らねエベなあー・・・」

水野さんとの勉強は時間の経つのも忘れてしまう。いつまでもこうして勉強したいと思った。この部屋に泊まって、水野さんと枕を並べるまで勉強したいと思った。

小腹がすいたので、サツマイモでも食べて終わりにしようと言った。

「水野さん、東京の大学ってどんなだあ、教えてける？」

「そうだねえー・・・」

どう話したらいいのか、水野さんはしばらく考えてから、

「君の行くべきところだろうな。大学でも君のような人が来るのを待っていると、全国から夢を持った人達が集まるからね、いい出会いがあれば、実に楽しいところだし大いに勉強になる。ただし、しっかりとした自覚を身に付けて行かないと、ダメだね」と、言った。

「自覚とは、なんだべ？」

「君は早くからそれを持つとうとしていたことは、この前、聞いて良くわかったよ。だけど、本物の自覚とは違っていたからこうして勉強しているのさ。ヘッセは立派だと思うけど世の中には違った色の巨人もいるんだ・・・前に言ったよね。運命は自分で切り開く方が大事だと。たった一つの事件によって生まれた覚悟に、拘泥してはいけないと思う」

「・・・」

「難しいからうまく言えないけど、・・・つまり、真理を持った自覚を獲得するための準備というのかなあ・・・本物を受け入れる容量を持った自覚というのか。まだ若くて成熟しない内に、それを持てたら素晴らしいね・・・」

「先生、余計わかんねべー」

「ハハハ、そうだね」

康夫は嬉しかった。答えの中々でないものを考え考え話す水野さんの誠実さが嬉しかった。少しずつそれを学んでいこうと意欲もわいてきたし、康夫を待っていると言った大学に行きたい。いける家庭環境でないことは知っているながらも、水野さんのいる東京へ行きたいと思った。

水野さんは、机の引き出しから一枚の写真を取り出して見せてくれた。大学のキャンパスを背景にして立つ、女の人の写真だった。

「僕が失恋した彼女の写真だ」

「あんな、きれいな人だべやー、水野さんの同級生だか？」

「うん、ゼミで一緒になって知り合った」

「なんで失恋したただ？・・・なんてまあ、きれいな人だなやー」

「僕から遠慮した・・・」

「なんでえー？こんなしゃれこけた人、ここらじゃ、いねべえ」

「ハハハ、そうか？」

「ハハハ、そうか？じゃねえべな。なんとかより戻せねのか？・・・嫌われたかや？」

「嫌われたわけじゃないけど、もういいんだ」

「んだったら、この人の方が、可愛いそうだべー」

「君は我が強いのに、優しいんだな」

彼女とは文学のゼミで一緒になって、シェークスピアやモリエールの演劇だとか、ビスコンティの映画だとか、不思議と意気投合した仲だと言った。それから海の見える丘公園や野外コンサートなどへデートもして、充分に青春も謳歌したと、楽しかったことばかりいろいろ話した。

そして、

「康夫君・・・僕は来週、一旦東京へ帰るんだ」と、言った。

「エッ！」

「病院で検査があつてね。前から予定していたんだけど、そう君に言えなくてね。でも、検査結果ではすぐ戻れると思うんだ」

「なんでエ、春までいるって言ったべなー」

「うん。そうなんだけど、家の都合もあつて少し早まった・・・」

「しかたねえけど、今度、いつこれんだべ？」

「わからない・・・でも、この部屋はこのままだから、必ず帰るよ」

「んだべー。おら、もっと勉強してえだ。水野さんと勉強してえだ」

「ああ、僕も、君を放うったままで行きたくはない。でも、しかたないんだ」

「先生！明日、泊りがけで勉強に来てもいいですか？」
「うん、ちゃんと家の人に断わってくるならいいよ。僕も教えたいことや、話しておきたいことは一杯あるから・・・」

最後の授業の日は、朝から嘘のように晴れわたって真っ白な雪からの反射が眩しかった。祖母に作ってもらった十個のお稲荷さんを背負って、雪をかき分け歩いていると汗が噴き出してくるのがわかった。いつも霞んで見えない山々がはっきりと見えて美しい。ただ、今日が最後の水野さんとの個人授業かと思うと、無性に寂しくなる。別れがたい思いが湧き出てきて、とても晴れ晴れした気持ちにはなれなかった。その日の個人授業は、何かに追い立てられるようにアツという間に過ぎた。遅い夕食でお稲荷さんを食べて小一時間また勉強をした。そして、とうとう夜九時に終わった。

康夫は、祖母にちゃんと礼を尽くすように言われていたから、

「先生！これまでどうも、おせわかげやした。ありがとなっし」と、両手をついて深々と頭を下げた。

「康夫君・・・たった6日間だ。まだまだ足りなくて申し訳なかったけど、あの約束を忘れずに頑張るんだぞ！」

あらたまったぎこちない康夫の挨拶に、水野さんの力強い励ましも上ずった声に響いた。心の底からの感謝の念は、長い沈黙をつくって目頭を次第に熱くしていく。康夫はその落涙を見せまいと外にある便所に急いで用足しに出た。

外は、月が高く昇って眩いほどに雪を明るく照らしている。抑えきれない涙と、胸に詰まった息を一気に吐き出すようにすると、吐く息は月明かりで真っ白に大きく煙った。異様なほどに白く光った。また、昼の好天で融けた雪が、夜の放射現象でシンシンと冷えて硬雪となっている。便所のすぐ横は雪に埋もれた用水路だ。康夫はそっと足を乗せると、大声で叫んだ。

「先生！水野さん！外に出て見なんせー」と、叫んだ。

「先生、早く来てみなんしょ！」

「どうした？」

「ほらっ、こうして雪の上歩いてみなんしょ」

「んー？・・・あれっ？どうしてえー？」

「アツハハ、硬雪だべ。水野さんは知らねべ？」

「あッ、凄いなあ。全然足が埋まらないね。真っ白なコンクリートの上を歩いてるみたいだ」

「そらオーバーだべな。そうだ！水野さんオーバー着て田んぼの真ん中に行

ってみんべ。めったに硬雪にはなんねえから、会津のお土産になっぺよー」

便所の先は雪に埋もれた田んぼばかりだが、月光に反射すると田んぼは燐光を放つ雪の平原となって遠くどこまでも明るく光っているのだ。

二人は並んで硬雪を踏んで歩いた。畑も田んぼも、雪で埋まった川の上も、歩く足は埋まることはない。ザッザッと心地良い音を響かせながら、静まり返る銀世界をどこまでも音を出してついでくる。月の光に誘われてどこまで行くのかもわからずに歩いた。

「うわあー、月明かりと一面の雪でなんて明るいんだ！街灯なんかいららね。こんな銀世界があるとは・・・」

「神様が水野さんのために創ってくれたんだべな。きっと・・・」

「君は、信仰があるのかい？」

「特別ねえ。前は神様なんか嫌いだった。だけど、水野さんと出会って神様みてえのいると思うようになっただ」

「シンシン冷えた空気がなんてうまいんだろう。空気が甘く感じるなんて初めてだ。月明かりも、こんなに明るいんだね・・・オリオン座が月明かりで煙っている。たなびく雲も何もかも光る銀世界だ。綺麗だなあー」

「んだか・・・」

「この雪、硬雪？・・・この硬雪を踏む音がなんともいい。会津盆地の真ん中なんだね・・・遠くまで雪の平原だ。どこまでも歩いていける雪の砂漠だ」

「そんなに感激してくれっと嬉しなあー。水野さんが立っている場所は猫柳の木があっから川の上だべな。硬雪はどこ歩いても落っこちねえー」

ふと、水野さんは歩みを止めて空を仰いだ。

「落ちるか！・・・康夫君、君にだけに・・・いつか、誰にも話せないことを話すと言ったね？・・・僕には、肺の病気以外にもっと大事な病気があるんだ・・・骨髄性白血病という癌だ。もう長く生きることができないと思う・・・僕はあつ時、その事実を聞いてしまった。だから、担当医に本当のことを話してもらおうと迫った」

「・・・」

「それが僕の運命なら、自分の運命を自由に生きたいから。と、迫った。医者には僕の気持ちを理解して話してくれたよ」

「・・・」

「会津は母親の生まれた処だ。母も癌で亡くした・・・僕は幼い頃、母の実家に遊んだことがある。実家は飯盛山の近くにあったんだ。鍛冶屋をしながら畑も少しあって、母は祖母の手伝い事で花を育てて売っていたらしい。近くには白虎隊のお墓があるしね、観光客向けだと言っていた・・・母が僕に言い残し

たことは、もう一度会津に暮らしたい。山や川や花や澄んだ空気の中で貧しくてもいいからもう一度会津に戻りたいと、それだけ言って死んでいった・・・きっと、こんな月夜の銀世界も知っていたんだ・・・」

「なんでだ！卓球もできるし、元気でねえーか。嘘だ！なんかの間違いだべ」「・・・専門病院だ。間違いじゃないよ。もう、その兆候も現れているしね。でも、約束したろ？必ずもう一度帰って来るって・・・君と出会えてよかった。君の少しでも役に立てたなら、僕もここに来て生きてきた甲斐もあるというものだ。運命は自分で切り開けるものならそうしなければならぬ。わかるよね？そうすれば・・・僕は、君の中で・・・」

「そんなこと言わねえでくんろ。おら、信じねえ。絶対間違いだべ・・・おらー、心から水野さんに感謝してるだ。神様に感謝してるだ。だから・・・」

「康夫君！君は、大人のバチストになるんだ。いつかきつと解る時がくる。そして・・・そして、こんな綺麗な夜の世界があるなんて知らなかった・・・ありがとう」

水野さんの目から月の光がこぼれ落ちた。康夫は水野さんの袖を固く掴んで、どうしたらこの人を救えるのだろう。どうしたら、この人の力になれるのだろう。どうしたら・・・どうしたら・・・と、果てしなく思いを巡らしていた。

すると、水野さんは一番好きなボードレールの詩に、自らの思いを乗せて、月光の雪景色を模写するように口ずさんだ。

『遠くまで真つ白な地平線の向こうに、小さな人影がゆらいで見える・・・あの微小、あの危うさは、何とこの私と似ていることか・・・』

愛する人よ、いとしい子よ、お前に似た遠い国へ

さすらいの旅の想いをのせながら・・・

氷も雪も、きらめく結晶にして歩いていこう

月夜の明りも、硬雪も、お前だけが知る秘密の道しるべ

不可思議な魅力を放って、私を誘う・・・

そこにすべては整いと美と静けさと・・・甘い空気だけが漂っている

お前に似た遠い国がある。そこには整いと美と、お前の望みをつくすための：愛に満ちたやすらぎがある・・・』

完